

特定非営利活動法人グラウンドワーク三島

平成 29 年度「英国スタディ・ツアー」報告書

日程：平成 29 年 8 月 23 日（水）～8 月 31 日（木）



都留文科大学・共通科目「グローバル・フィールドワークⅡ」対象科目

特定非営利活動法人グラウンドワーク三島



〒411-0857 静岡県三島市芝本町 6-2

TEL 055-983-0136 FAX 055-973-0022

E-mail info@gwmishima.jp

Website: <http://www.gwmishima.jp>

平成 29 年度「英国スタディ・ツアー」報告書

目 次

I. スタディ・ツアーの概要

1. スタディ・ツアーの目的 1
2. 日程表 1
3. 参加者 2
4. 視察先の概要 3

II. 視察調査報告

1. グラウンドワーク UK・ディグベス地方 6
(芦川菜摘、遠藤由唯、滝悠希)
2. オールストン・ムーア 10
(鈴木大貴・菊池駿亮)
3. 湖水地方 13
(秦歌奈子、高橋玲佳)
4. コッツウォルズ地方、世界遺産都市バース 15
(滝悠希、鈴木大貴、菊池駿亮)
5. ブライトン—ブライトン観光局、ビッグレモン、セブン・シスターズ 18
(芦川菜摘、遠藤由唯、高橋玲佳、秦歌奈子)

III. 全体ふりかえり・講評

1. 立教セカンドステージ大学参加者 22
(青木美恵、岡庭正行、木下将詞)
2. 先行きが見通せない中での平静さ (通訳：松田徳子) 27
3. 講評・感想 (松下重雄) 31
4. 講評・感想 (安倍万莉子) 33
5. 講評 (渡辺豊博) 34

I. スタディ・ツアーの概要

1. スタディ・ツアーの目的

平成 29 年 8 月 23 日（水）から 8 月 31 日（木）までの 9 日間にわたり、グラウンドワーク三島の主催による、「英国スタディ・ツアー」を実施した。なお、本スタディ・ツアーは、都留文科大学の共通科目「グローバル・フィールドワークⅡ」の対象科目でもある。

本スタディ・ツアーは、グラウンドワークの発祥地である英国を訪問して、英国の NPO やボランティアセクター、社会的企業への視察と具体的な実践活動への参加・体験により、多様な社会的・地域的な課題を抱えた生活現場における課題解決力とコミュニケーション力、実践力を高めるとともに、国際的な交流と見識・知見を身に付けることを目的としている。

2. 日程表

日付	行程
8/23 (水)	ロンドン・ヒースロー空港着→バーミンガムへ ホテルロビー現地集合 参加者全体打合せオリエンテーション バーミンガム泊
8/24 (木)	ホテル発 ① グラウンドワークUK ② 社会的企業研修：中間支援団体 iSE 等 バーミンガム泊
8/25 (金)	① 社会的企業タウン オールストン・ムーア ランカスター泊
8/26 (土)	① 湖水地方 フットパス散策体験 ② ウィンダミア湖 散策 バーミンガム泊
8/27 (日)	① コッツウォルズ研修（英国ナショナルトラスト活動など研修） ② バース市内研修（世界文化遺産地区散策） ロンドン泊
8/28 (月)	終日：各自・目的研修 ロンドン泊
8/29 (火)	① ブライトン観光客 ② 社会的企業研修：ビッグ・レモン ③ セブン・シスターズ散策、研修のまとめ ロンドン泊
8/30 (水)	解散 ロンドン・ヒースロー空港(各自の時間に合わせて)→8/31（木）日本着

3. 参加者

(1) 参加者（敬称略、順不同）

No	氏名	性別	所属
1	遠藤 由唯	女	都留文科大学 社会学科 3年
2	芦川 菜摘	女	都留文科大学 社会学科 3年
3	菊池 駿亮	男	都留文科大学 社会学科 3年
4	鈴木 大貴	男	都留文科大学 社会学科 3年
5	高橋 玲佳	女	都留文科大学 社会学科 3年
6	滝 悠希	男	都留文科大学 社会学科 3年
7	秦 歌奈子	女	都留文科大学 社会学科 3年
8	青木 美恵	女	立教セカンドステージ大学
9	木下 将詞	男	立教セカンドステージ大学
10	岡庭 正行	男	立教セカンドステージ大学
11	松下 重雄	男	長野大学環境ツーリズム学科准教授

(2) 同行指導者

No	名前	所属	備考
1	渡辺 豊博	グラウンドワーク三島 専務理事・事務局長 都留文科大学特任教授	引率 指導
2	松田 徳子	通訳、コーディネーター	通訳
3	石岡 真由美	グラウンドワーク三島事務局職員	同行

4. 視察先の概要

(1) 視察先の活動概要

■英国グラウンドワーク (Groundwork UK) <http://www.groundwork.org.uk/>

英国グラウンドワークは、1980年代初頭、英国内の地域社会の衰退を背景に、環境省によって設立された。住民・企業・行政がパートナーシップを組み、地域環境の改善を通して経済および社会の再生を図り、持続可能な地域社会を構築することを目的としている。各地域に設立された実働団体（トラスト）においては、専門性を備えたスタッフが中心となり、地域の再生と活性化に向けパートナーシップ型のプロジェクトを展開している。

■アイエスイー (Initiative for Social Enterprise: iSE) <http://www.i-se.co.uk/>

バーミンガム・ディグベス地区に拠点を置く社会的企業の間接支援団体。持続可能な地域づくりを担う新しい経済主体である「ソーシャル・エコノミー」の発展を目指し、社会的企業の創業支援や経営支援などを行っている。

■オールストン・ムーア (Alston Moor)

イングランドの背骨とも称されるペナイン山脈に位置する。湿原地帯 (moorlands) には、英国で最大規模の鉛や亜鉛などの鉱物資源がある。ローマ時代から採掘が行われ、この地に繁栄をもたらしてきたが、第二次世界大戦後には、それも衰退していった。しかし近年、多くの社会的企業が誘致されたのをきっかけとして、ツーリズムなどの拠点として注目を集めている。英国で最初の「社会的企業タウン」の称号が授与された。

■サイバームーア (Cybermoor) <http://www.cybermoor.org/>

オールストン・ムーアの住民に対するインターネットの技術的サポートなどを行っている。このことを通して、雇用や高等教育への進学機会が拡大すること、そして ICT を活用した地域社会ネットワークを構築することなどを目指している。

■湖水地方 (Lake District)

イングランド北西部に位置する国立公園。氷河時代の痕跡が色濃く残り、渓谷沿いに大小無数の湖が点在している。

今回は、ウインダミア湖周辺の景色を楽しみながら、「フットパス（農場や自宅の敷地内などの私有地も含めて歩くことができる道）」などを散策する。

■英国ナショナルトラスト (National Trust) <https://www.nationaltrust.org.uk/>
歴史的建造物や景勝地の保護を行う民間団体。愛郷心や国民の一体感といったナショナル・アイデンティティを醸成、強化することなどを目指している。2015年現在、会員424万人とボランティア6万人を擁しており、英国最大の自然保護団体である。

■コッツウォルズ (Cotswold)
古くは羊毛の交易で栄えた歴史があり、今も昔ながらのイングランドの面影を残した建物や田園地帯が残っている。近年、これらの景観を活かした観光業が盛んになり、毎年多くの観光客が訪れている。

■世界遺産都市：バース
1987年に街全体が世界遺産登録。お風呂の「bath」という言葉の由来にもなった温泉の歴史は古く、紀元前にまで遡る。そうした資源を活用し、18世紀から19世紀にかけてのジョージ王朝時代は、温泉リゾート都市として栄える。ローマ浴場跡、バース大僧院、ロイヤル・クレセント集合住宅などの歴史的資源が市街地内に点在する、英国有数の観光都市（人口約8.3万人）。

■ロンドン (London)
英国の首都ロンドンは、屈指の世界都市であり、世界で最も多くの来訪者数を誇っている。芸術、商業、教育、娯楽、ファッション、金融など幅広い分野で強い発信力・影響力を保持している。

■ブライトン (Brighton)
英国有数の海浜リゾート地。ビーチが主要な観光資源であり、砂浜に沿ってバー、レストラン、ナイトクラブなどが立ち並んでいる。今回は、ブライトン観光局を訪問し、観光振興などの取り組みについて話を伺う。

■ザ・ビッグ・レモン (The Big Lemon) <https://thebiglemon.com/>
環境に優しく持続可能な公共交通機関を提供することをミッションに掲げている。太陽光や廃食用油をリサイクルしたバイオ燃料で走るバスなどが注目されており、2016年には環境社会企業賞を受賞した。

■セブン・シスターズ (Seven Sisters)
イングランド南東端、イギリス海峡に臨む白亜紀の石灰岩の海食崖。切り立った断崖の波打つ断面が、7人の乙女が並び立っているように見えることからその名がついた。付近一帯は公園に指定され、海鳥や海浜植物が保護されている。

(2) 視察先対応者

訪問日	団体名	連絡先	
8/24 (木)	Groundwork UK	担当者	Graham Duxbury, Eileen Henderson
		電話	0121 236 8565
		メール	Eileen.Henderson@groundwork.org.uk
		住所	Lockside, 5 Scotland Street, Birmingham B1 2RR
	Digbeth Social Enterprise Quarter iSE (Initiative for social enterprise)	担当者	Sallie Ryan
		電話	0121 771 1411
		メール	Sallie.Ryan@i-se.co.uk
		住所	Avoca Court, 23 Moseley Road, Digbeth, Birmingham B12 0HJ
8/25 (金)	Alston Moor (Cybermoor)	担当者	Sue Gilbertson
		電話	01434 382808
		メール	sue.gilbertson@cybermoor.org.uk
		住所	The Town Hall/Front St, Alston CA9 3RF
8/26	(Lake District)		
8/27	(Cotswalds)		
8/28	(London)		
8/29 (火)	Visit Brighton	担当者	Julia Gallagher
		電話	01273 291614
		メール	Julia.Gallagher@brighton-hove.gov.uk
		住所	VisitBrighton Brighton Town Hall Brighton BN1 1JA
	The Big Lemon	担当者	Norman Baker, Neil Brooks
		電話	01273 681681, 07804 294778(Neil 氏)
		メール	norman@thebiglemon.com
		住所	Protran House, Boundary Road, Brighton BN2 5TJ

II. 視察調査報告

1. グラウンドワーク UK・ディグベス地方（芦川菜摘、遠藤由唯、滝悠希）

1) 組織の概要

① グラウンドワーク UK

グラウンドワーク UK は 30 年以上前（1985 年）に企業と政府を結びつけるために設立された団体（有限責任会社）である。現在でもイギリス社会をよりよく、持続的なコミュニティを築いていけるように多様な社会的な活動に取り組んでいる。

グラウンドワーク UK が、現在、主に力を入れていることとしては、3 つあり、「より過ごしやすく、緑のある場所づくり」「環境に配慮した生活を働きかける」「雇用を生み出す」というものだ。

例えば、「グリーンドクター」という環境の専門家チームを雇用して、燃料や暖房などの料金の削減などのアドバイスを行うことにより、貧しく暖房が使えなかった家庭をサポートしたり、雇用を生み出すために、何かしらのスキルが得られるような訓練を行ったり、公園づくりを行うなど、幅広い分野で、様々な方法でイギリスの困っている人たちをサポートしている。

また、「グラウンドワークユース」というプロジェクトは、16 歳から 24 歳の若者が、リーダーシップなどの才能を発揮する機会をサポートするためのプロジェクトである。この活動により、未来のイギリスのコミュニティをつくっていける人材の育成ということにもつながる。

さらに、失業率が高いイギリスの中で、なにかスキルを身に付けて将来働きやすくなるというところにも貢献している。現在、補助金が年々削られてきてしまっている中で、サポートしてくれるスポンサーの確保にも力を入れている。

③ ディグベス地区

8 月 2 4 日午後から、バーミンガムの社会的企業タウンであるディグベス地区を訪れた。そして、ディグベス地区全体をマネジメントしている組織の iSE (Initiative for Social Enterprise) とその組織が支援する様々な社会的企業を訪れた。ディグベス地区は iSE の活動やバーミンガムの中心部に近いということから社会的企業が多く活躍しており、地区全体でのこれまでの収益は約 2 千万ポンドにも上るといふ。

・ iSE (Initiative for Social Enterprise)

iSE は自ら企業との契約や行政からの委託による資金を集め、他の社会的企業や女性の社会的企業家を支援する活動を行っている。また社会的企業を対象とした会合を開くなどして、社会的企業同士のパートナーシップを結ぶ活動なども行っている。このような活動の影響でディグベス地区には農業振興、若者の就労支援など様々な活動を行う社会的企業が数多く存在する。

・ Centarla

ポーランド人や移民を主な対象とし、文化振興、農業振興、ビジネスアドバイス、カフェ経営等を行っている。イングランドから補助金をもらっており、経営するカフェへのアーティストの招致や作品の展示を通じた文化振興などの活動を行っている。

・ Changes UK

薬物、アルコール依存症患者の社会復帰を支援する団体である。支援を受ける者は無料で8週間～2年間の更生プログラムを受けことができ、その間の住宅も用意されている。財源は国からの住宅手当や社会的企業のネットワーク、寄付がメインであり、プログラムを受けた者の78%が依存症から回復している。

・Criative alliance

国からの補助金を主な財源とし、見習い制度という制度を通して若者の就労支援を行っている。マーケティングやグラフィックデザイン、映画産業などのジャンルの企業に見習い希望の若者を仲介するといった活動がメインである。仲介するにあたって、英語や数学、ICTといった基本的なトレーニングを行うという活動もしている。

	
<p>グラウンドワーク UK</p>	<p>バーミンガムを流れる運河</p>
	
<p>グラウンドワーク UK</p>	<p>iSE (Initiative for Social Enterprise)</p>

2) 感想

都留文科大学 3年 芦川菜摘

今回の英国スタディ・ツアーは、私の人生において、初めてのヨーロッパであったため、見るもの食べるもの全てが新鮮で、9日間の研修は、とても貴重な経験となりました。私は、大学生になった頃から、この英国スタディ・ツアーに興味を持っていたため、今回、参加することができとても有意義な感動的な旅になりました。

私が、英国スタディ・ツアーを通して、強く感じたことは、9日間という限られた日数の中で、多くの社会的企業に訪問し、大変貴重なお話を聞いたことです。その中でも、recovery centralという薬物依存者の支援をしている団体がとても印象に残りました。恋愛や人間関係などが原因で薬物に依存してしまった人たちを更生させようと、8週間のプログラムを行なっています。

そのプログラムの中では、対人関係や自分がなぜ薬物に依存してしまったのかを習得者同士で話し合っているといいます。この団体は、①解毒、②回復、③自立、④自分で暮らしていけるよという、4つの段階で支援しています。お話を聞いていて驚いたことは、習得者は、このプログラムを無料で受けているということです。

日本では、このような何らかのプログラムを受ける場合、習得者はお金を払わなくてはいけないので受けたくても受けられない人もいますが、英国では無料で受けられるため、自分を変えたいと思えばそれを支援してくれる団体があることは、社会の中で大きな存在意味をもつと感じました。数字でも、このプログラムを受けた習得者のおよそ78%が薬物依存の再発なく自立しているという結果も出ているといいます。また、この団体では回復中の習得者も働いているそうです。

そして、もう一つ驚いたことは、薬物依存者の支援をするこの団体の創設者は、創設者自身が以前、薬物依存者であったということです。私は、今までこのようなお話を聞いたことがなかったため衝撃を受けましたが、これを機に社会の中で弱い立場にいた人でも社会のためになにかできることが必ずあるのだなということを感じました。もしかしたら、自分と同じ経験をしている人こそが、相手の立場に寄り添って理解してあげることができるのかもしれないと感じました。

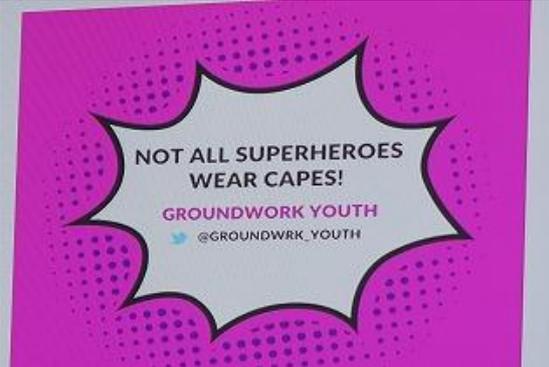
日本社会においても、薬物に依存してしまい抜けだしたくても抜け出せない状態にいる人や、人間関係が上手くいかず悩んで引きこもってしまっている人が多くいます。そこで、英国のrecovery centralのような、自立したいと考える人を支援する団体が必要であると強く感じました。英国では、日本よりも社会的に弱い立場に立っている人たちを支援する団体が多くあり、支援も手厚く感じ、変わりたいと思えば社会がそれを支援する体制が整っており、これからの日本もこのような体制づくりを考えていく必要があると感じました。

また、英国の人たちは、自分たちのまちを自分たちで良くしていこうという気持ちを持っている人が多いなど、他の社会的企業や施設を訪問して感じました。英国の若者の就職先に、NPOや社会的企業が上位に上がってくるというお話を聞いて、英国の人たちがもつ、自分たちのまちを自分たちで良くしていこうという気持ちと比例しているなと感じました。

そして、英国スタディ・ツアーを通して、とても多くの人たちに出会うことができました。訪問先の社会的企業でお話をしてくださった人たちやお店の店員さん、バスの運転手さんなど、英国の人たちと、私のつたない英語を理解しようと一生懸命聞いて下さったため、お話することができ、とても貴重な経験となりました。また、立教セカンドステージ大学の3名の方たちとも出

会い、共に研修することができ、様々なお話を聞かせていただきました。英国スタディ・ツアーに参加しなければ出会えなかった人たちと触れ合うことができたことも、私の中で忘れられない思い出となりました。

最後に、引率して下さった渡辺先生、松下先生、石岡さん、通訳をして下さった松田さん、通訳・コーディネーターの小山さん、安倍さん、湖水地方を案内して下さった Robin Henshaw さん、研修先の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。これからも、恐れず新しいことに挑戦し、学びを深めていきたいと思えます。本当に、ありがとうございました。

	
<p>アクションプランの作成 (グラウンドワーク UK)</p>	<p>社会的企業視察 (Changes UK)</p>
	
<p>社会的企業 (Creative alliance)</p>	<p>運河を背景に集合写真</p>

2. オールストン・ムーア（鈴木大貴・菊池駿亮）

1) 組織の概要

オールストン・ムーアはイギリスにおけるソーシャルエンタープライスタウンの1つであり、1番最初にソーシャルエンタープライスタウンに選ばれたまちである。オールストン・ムーアは、かつてイギリス最大の鉛を生産する鉱山があった鉱山都市であった。1950年代に衰退してしまっ。衰退してしまっオールストン・ムーアは社会的企業の誘致やソーシャルエンタープライズによって復活したまちである。まちの年間収益は2002年時では220万ポンドであり、人口は2000人程度である。また、オールストン・ムーアには問題の根本を解決するという意識、いわゆる「CAN DO」の意識を持っている個人が多い点。他の地域と隔絶されているという点があることが、オールストン・ムーアというまちの個性として挙げられる。

	
オールストン・ムーア町並み	オールストン・ムーア町外れ
	
オールストン・ムーア草原	オールストン・ムーア鉄道の駅
	
サイバームーアでの説明	街中散策

2) 感想

都留文科大学 3年 鈴木大貴

オールストン・ムーアは、住民の自立と社会的企業のまちであると感じた。オールストン・ムーアには、前々回のスタディ・ツアーで1度訪れたことがあるが、その際よりもオールストン・ムーアというまちについて深く知り、考えることが出来た。

私が今回、オールストン・ムーアを視察して考えたことは、若者にオールストン・ムーアに来て欲しいという課題である。オールストン・ムーアの課題として若者に来て欲しいといった課題がある。

しかし若者に対してオールストン・ムーアは現在、何も PR していないのである。また、ニューカマーと呼ばれる新しくオールストン・ムーアに移住してきた方の中で、特にエネルギッシュなニューカマーとオールストン・ムーアに元々住んでいた保守的な人との対立も問題となっていた。しかし、この問題は 15 年間の変化によって昔から地域に住んでいた保守的な人がニューカマーを肯定的に考えるようになったという変化があった。

また、オールストン・ムーアで生まれて違う都市の大学に進学した若者がオールストン・ムーアに戻って来ているという現状がある。オールストン・ムーアに戻る理由としては、若者が子育てをしやすく、行政が若者に企業支援指導をしているといったことが理由として挙げられる。

オールストン・ムーア若者が来て欲しいという課題に対して、若者が来るようになるような PR などは行ってはいないが若者に来てもらうための政策などは行っている。しかし、新しく来た若い人が家を買うには高いという問題や簡単に新しい建物を建てるができないという問題もある。私はこれらの問題をどのように解決していくのかを今後調査を行っていきたいと考えた。

都留文科大学 3年 菊池 駿亮

初めてオールストン・ムーアという町を訪れて思ったことは、広大な自然の中で暮らす人々の強さと積極性だ。オールストン・ムーアは近場のスーパーでも 40km も離れており、暮らすには不便であると感じた。また、高低差が大きな地域であるため、高齢者はこの町から出て行き廃れていくのではと思った。

しかし、現在では地域内に 26 の社会的企業が存在し、多くの住民がボランティアとして活動を助けており、外部からも移住者がやってくるのだそうだ。このオールストン・ムーアは都会で暮らすのがつらいという人が多く移住する地域であり、高齢者は都会よりも長閑な場所で住みたいという人が多いのだ。実際に目で見たところ住人同士が協力して廃屋を店として改装、共同で運営などを行っている。私はこの姿は1つの地域としての理想なのだと感じた。何より、地域内で資金や人材が廻っているため余計な経費を出さずに済むのだ。

その反面、大きな課題も抱えている。1つは若者への PR。もう1つは資金の不足だ。高齢者だけでなく若者もこのオールストン・ムーアに移住してくるが、大々的な若者への PR は行っていないのだという。どの地域においても若者のマンパワーは必要不可欠だ。高齢者だけでは限界が訪れる。2つ目の資金不足においては確かに地域内での循環によって経費は抑えられている。それでもまとまった資金を蓄えるのは難しいのだ。町内にあるフィットネスジムクラブを運営しているクリスさんは「未だに補助金だよりであり、利用料もあるがやはり資金が足りない」と現状を教えてくれた。

この2つの課題において若者へはインターネットを通じたPR、資金において現状は政府からの補助金を頼りに少しずつ自立できるようにしていくべきだと思う。また、私個人としては移住者への配慮として家屋の提供をもう少し進めるべきだと思う。移住者は高齢者と若者両方の年齢層からあるため、家屋が足りないという問題も生まれている。よって地域内で家屋の改築・改装を前面に出すべきだと思う。

今回学んだオールストン・ムーアでの知識や経験は私自身の在り方や方向性を形作る大切なものとなった。特に若者や資金の問題は日本の地方でもよく見られる問題だ。学んだことを必ず生かせるよう、今後も調査・熟考を行っていきたい。

	
オールストン・ムーア散策	オールストン・ムーア散策
	
街唯一のトレーニングジム	オールストン・ムーアまでの道のり

3. 湖水地方（秦歌奈子、高橋玲佳）

1) 組織の概要

今年世界遺産に登録された湖水地方は、イングランド北西部に位置する国立公園だ。国立公園と言っても個人所有の土地もあるが、4分の1をイギリスの歴史的な遺産と自然環境を維持する事を目的とする民間の団体「ナショナル・トラスト」が管理している。

湖水地方は、無数の湖が点在する地域で、標高の低い山が連なり、昔ながらの壮大な景観を見ることができる。のびのびとした自然の美しさとのどかな町並が魅力的で、田舎の小さな村なのに世界中から観光客が訪れる。このような美しい景観を守るために、湖水地方では、許可がない限り、建物を建て替えてはいけないという規則がある。自然、景観に対する地元の人々の保護活動がすばらしい。また、湖水地方には、フットパスという歩く権利がある。他の所有者の土地でも許可なく歩いていい。湖を眺めながら歩いたり、羊や牛の放牧場の横を通ったり、マイナスイオンたっぷりの森の中を散策できる。湖水地方には、100年前から変わらないイギリスのすばらしい景観が残されている。

また、多くの文学者、芸術家、思想家にもインスピレーションを与えた美しい湖水地方の景観。「ピーター・ラビット」の作者のビアトリクス・ポッターは、湖水地方の美しい景色に魅せられ、晩年をここで暮らし、世界中に愛され続ける数多くの作品を生み出した。

2) 感想

都留文科大学3年 高橋玲佳

英国スタディ・ツアー3日目、私達は湖水地方を訪れ、フットパスを散策した。フットパスとは、個人の私有地でも、観光客を含め誰でも立ち入ることができる「通行権」という権利を元に整備された道である。その道のりは、歩行者が歩きやすいように整備され、家畜の羊が逃げ出さないような柵が設置されていた。よく整備されている印象だった。

しかし、一方で、家畜には毒である花が一面に咲いている一角があった。一見、一面に花が咲いており綺麗な丘に見えたが、話を聞いて刈らなければならないが、刈ることが出来ていない状況であることが分かった。ただ歩いて景色を見るだけでは、知ることができない事も見て知ることができ、大変勉強になった。

広大な土地を維持管理していくことは困難だ。ナショナルトラストの取り組みを今後も継続していくためには、まず認知されることが重要ではないかと感じた。フットパスを歩いている途中にも、多くの人に知ってもらうために、看板にQRコードを取り付け、訪れた人にナショナルトラストに関する情報を提供するなどといった工夫が見られた。

その土地の現状や素晴らしさを多くの人を知ることで、支援の輪が広がっていく。『ピーターラビット』の作者であるディアトリクス・ポッター氏もその一人である。彼女は、ロンドン出身であるが、湖水地方の自然と伝統的な生活に惹かれ、広大な土地と家を本の売り上げで購入し移り住んだ。彼女は死後、自身の広大な土地や家をナショナルトラストへ寄付した。彼女が寄付した土地には、現在でも石碑が建っており、彼女のポエムが書かれている。

また、私はこの湖水地方を訪れるまでは、ありのままの自然を残すことが最も重要であると考えていた。しかし、今回フットパスを訪れて、自然を残すことはもちろんだが、それだけでなく、例えば湖水地方では、放牧が盛んに行なわれているが、そういった文化も同時に保護しなければ

ならないという話を聞いて、考え方が変わった。自然だけを重要視した環境保全では、人間の生活、文化が保護されるとは限らない。人間の生活、文化が保護されない環境保全は継続することが困難である。自然と人の生活、文化の双方を重要視した環境保全が継続のために必要であると感じた。

私は今回、湖水地方を訪れて、実際にトラスト運動によって保護されている土地を見て、歴史や現状を肌で感じる事ができた。と同時に、環境保全について考えるきっかけとなった。確かにイギリスのトラスト運動は先進的だが、課題もある。しかし、そういった課題をいかにしてクリアしていくかという姿勢に感動した。自分達の大切な環境を自分達で守っていくという姿勢こそ、私達は見習わなければならないと感じた。

	
フットパス散策	フットパス散策
	
フットパス内の水辺環境についての説明を受ける	ロビンさんより説明を受けました

4. コッツウォルズ地方、世界遺産都市バース（滝悠希、鈴木大貴、菊池駿亮）

1) 視察地概要

・コッツウォルズ

コッツウォルズは伝統ある石造りの建物と河や緑といった自然がある。コッツウォルズはいわば伝統と自然が融合した地域である。また英国ナショナルトラストが保護している自然や伝統ある建物が存在している地域にも訪問した。訪問した地域の中でも「THE PARK ISLE」は英国ナショナルトラストが保護している様々な自然や生物を観察することが出来た。

・バース

バースは1987年に世界遺産に登録された世界遺産都市である。バースでは、ローマ浴場跡、バース大僧院といったものを遠目ではあるが視察することが出来た。またローマ風の建築を数多く見ることが出来た。また、映画「レ・ミゼラブル」の撮影場所にも訪れることが出来た。

2) 感想

都留文科大学 3年 鈴木大貴

コッツウォルズでは自然や伝統の融合を感じられたことは勿論だが、自然と伝統といったものを崩さずに観光を取り入れているといった観光地としてのコッツウォルズを感じる事が出来た。そのためかコッツウォルズにはアイスクリーム屋やアクセサリーショップといった観光客向けの店も存在している。コッツウォルズには、多くの観光客が訪れており、観光客の中には日本人観光客も訪れていた。コッツウォルズは日本の観光地と違い元々コッツウォルズに存在している自然や建物を生かしつつ観光地化しているため、日本の観光地に見られる開発や儲けを重視している特徴がなかった。自然や建物を観光地化しても保護できているのは英国ナショナルトラストの力があってこそこの物のように感じた。日本の観光地にも英国ナショナルトラストの様な団体が存在していれば過度な開発を抑止し、地域の特徴と観光を融和させることが出来るのではないかと考えさせられた。

バースでは世界遺産都市の雰囲気を感じる事が出来た。私の人生において、世界遺産都市は訪れる事は殆ど無かったが、バースではローマ風の建物の中に店が存在しているため、バースという都市が出来た、当時の雰囲気を余り損なわずにバースという都市の町並みを視察することが出来た。

・都留文科大学 3年 菊池駿亮

コッツウォルズ地方とは特別景観地域に指定される丘陵地帯だ。昔ながらの風景や建築物が多々存在しており、私自身その光景に圧倒されていた。中でも今回訪れたボートン＝オン＝ザ＝ウォーター・バイブリー・世界遺産都市バースの3か所は今までにない感動を感じた。

ボートン＝オン＝ザ＝ウォーターは河川を中心に広がる水辺の街であり、“コッツウォルズのヴェネツィア”と呼ばれるほど美しい町だ。かつての廃屋を改装しアイスクリームショップや雑貨屋などを営んでいる。休日には家族が水辺で遊んだり、ストリートパフォーマーがダンスや演奏を披露するなど、建物が古いことも忘れさせるほどの賑わいだ。

2か所目のバイブリーはコッツウォルズ地方伝統の村であり、ティーハウスや多くの細かい彫刻が施された建築物が存在し、毎年多くの観光客が訪れている。1971年に昭和天皇がヨーロッパ旅行中に滞在していたこともあり、観光客には日本人の姿も見られた。特に注目すべきは昔ながら

らであろう変わらぬ景観の美しさだ。建築物、河川、木々のどれを欠いても生まれぬ美しさを感じた。現代において忘れてしまった心のゆとりを思い出させてくれる感覚が確かにあった。

3 か所目の世界遺産都市バースは国内でも有数の観光地であり、前述の 2 か所とは違い自然ではなく歴史を感じさせる場所だった。3 つの源泉から湧き出る温泉が有名であり、ローマ時代から続いたとされている。また、18 世紀から変わらぬ町並みは世界的に有名であり、世界遺産に認定されている。町の歴史だけでなく都市内にある河川の設計デザインも美しく多くの人々が訪れる。

コッツウォルズ地方において自然と歴史、2 つの観点から町の在り方を学ぶことができた。変わらないことで生まれる美しさを実感できたことが何より嬉しい。他者に市や町の発展計画を説明したとき明確な姿がイメージできないと納得してもらえない。その点では 1 つの理想を見て感じることはできたのは僥倖だ。また、3 つの町は規模も在り方も違いながらも 1 つの強い軸が存在していた。その軸は自然との調和であったり、歴史の景観であったりと様々だがそれを崩すことなく暮らし続けたからこそ独特の美しさが宇編まれたのだろう。私は今後の課題としてはこれから 3 つの街のような 1 つの美しさをどのように求めていくのかを調査していきたい。

都留文科大学 3 年 滝悠希

私は、今回の英国スタディ・ツアーを通して、多くの学びと多くの刺激を肌で感じる事ができた。文化や社会の構造の違いなど、実際に現地へ赴き、その場でお話を伺わなければわからない部分について知ることができた。また、個人的な旅行では訪れられない社会的企業への視察など自分の人生にとってとても貴重な経験をする事もでき、自分の将来についてこれまでなかった視点から考えるようになった。そんな英国スタディ・ツアーの視察を通して私の心に残っているのは、バーミンガムの社会的企業タウンであるディグベス地区、コッツウォルズ地方、ブライトン観光局である。

市民が自ら声を上げて立ち上がり、社会を変えようと行動する市民社会が形成されている英国。そんな市民社会を象徴する社会的企業タウンというものが私にとっては衝撃だった。そんなディグベス地区の社会的企業を支えている中間支援企業というものの存在が衝撃だった。社会貢献のために活動の様々な可能性を感じた。またコッツウォルズ地方では、各所の滞在時間が短かったにも関わらず、それぞれの土地の景観がとても印象に残った。そういった土地の維持管理を行っているのがナショナルトラストであるということが衝撃だった。また、ブライトン観光局の掲げる「伝統を尊重しつつ、新たなものも受け入れる」という考え方が新鮮でとても刺激的で心に残っている。

視察地の訪問では上記のことが印象的だったが、英国スタディ・ツアー全体を通して最も印象益だったのは、現地の人や同行していただいた方とお話である。ツアー 2 日目の夕方に同行していただいた方に対し、バーミンガムのパブでお酒を交えながら自分の身の上話を絡めた NPO に関する質問をさせていただく機会があった。その時にいただいたお返事の中に「英国のほとんどの NPO は自分の経験から問題に気づき行動を起こしている。」という旨のものがあつた。私はその言葉がとても心に残っている。そして、これからも自分の経験、それによる気づきを大切にしていこうと考えるようになった。そういった様々な視点、立場、経験の方とお話できたことが私にとっては何より大切な経験となつたのだ。

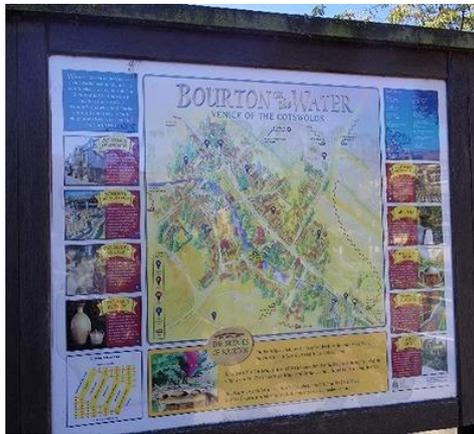
少し大げさかもしれませんが、今回のツアーは私の人生において大きなものになったと感じています。今回このような機会をいただけたことをとても感謝しています。このツアーを企画していただいた皆様、そして同行して下さった皆様、本当にありがとうございました。



コッツウォルズ地方



世界都市遺産バース



ボートンオンザウォーター



バース市内散策

5. ブライトン—ブライトン観光局、ビッグレモン、セブン・シスターズ

(芦川菜摘、遠藤由唯、高橋玲佳、秦歌奈子)

1) 概要

イギリス南部に位置する観光都市。人口は、27万3千人。ブライトン大学、サセックス大学があるため、20代～30代の若者が多い。観光業が盛んであるため、学生は卒業後もブライトンに留まり、宿泊業・レストラン等といった仕事に就くことが多い。若者の失業率は3%未満と非常に低い。

・歴史

ブライトンは、14世紀から19世紀頃まで小さな漁師町であった。ブライトンが国際的な観光地として有名となったきっかけをもたらした人物が、リチャード・ラッセル医師。彼はブライトンの町が気に入りに、1872年にロンドンから移住してきた。ラッセル医師は、この町の特徴は海であるとし、あらゆる病気の人は海に入り、海の水を飲むと病気が治るという考えを示した。当時、イギリスでは、海に入るという文化が無かったため注目を集め、ロンドン等の資産家が休暇の際訪れる場所となった。また、当時の王であるジョージ4世がロイヤルパビリオンを建てたことで、より一層注目されることとなった。

・ブライトン観光局

スタッフが12人の小さな組織。主な仕事の一つは、550の小さな企業同士のネットワークを構築することである。これによって、小さな企業でも大々的にPRすることができる。また、ブライトンでは、小さな観光地を集約し、「グレーターブライトン」とブランド化し売り出していくという計画があがっている。しかし行政からの予算が年々減少しているのが現状だ。そのため、組織のパートナーシップを活かし、ビジネスパートナーからの収入を増加させることによって、5年後までに行政からの収入を0にすることを目標としている。

・ザ・ビッグ・レモン

ザ・ビッグ・レモン (The Big Lemon) は、ブライトンにある環境にやさしく持続可能な公共交通機関を提供する社会的企業である。以前は、レストランなどから出る食用油をバイオ燃料にし、バスを運行していたが、今は平行して電気バスも運行している。電気バスは、長距離の運行が難しいため、長距離はバイオ燃料のバスを運行している。ザ・ビッグ・レモンのバスの魅力は、持続可能な公共交通機関であることと、運賃が安いという点である。利用しているバスの中には、中古車もあり、色を塗り替えたりなどして再利用している。

当初は、地元のサセックス大学まで運行しており学生が利用していたが、他のバス会社が、サセックス大学までの運賃だけをザ・ビッグ・レモンと同じにし、本数も多くしたため、利用客が流れていってしまった。また、10万ポンド以上の借金もあったことから、バス事業から撤退しようとも考えたという。そんなとき、ブライトン大学が提携を結んでくれたこともあり、撤退せずに結婚式の送迎や、フェスティバルの運行、大学までの運行など事業を多様化していった。他にも新しく、田園地帯のツアーなども始めた。これにより、2年前に黒字を出した。

ブライトンの市民は環境への意識が強いこともあり、バスを購入するにあたって市民に寄付金を募ったところ3、4週間で30万ポンドも集まりバスが2台も買えたという。このことから分かるように、ザ・ビッグ・レモンは、市民と共にあることが分かる。

また、バイオ燃料で運行するザ・ビッグ・レモンのバスに乗って、イングランド南東端にある白い断崖セブン・シスターズに連れて行っていただいた。セブン・シスターズ (Seven Sisters) の名前の由来は、ギリシャ神話に出てくるプレアデス7姉妹が元になっている。その7人の乙女が並び、立っているように見えることから名がついたという。高さは、150mにも及ぶという。写真からも分かるように、迫力のある海食崖である。



ブライトン観光局



ビッグレモンが運営するバス



バス車内の様子



ビッグレモンのネイルさんより説明



High & Over 散策



セブン・シスターズにて

2) 感想

都留文科大学 3年 秦 歌奈子

今回の英国スタディ・ツアーに初めて参加させていただいた。普通の観光ではできない貴重な体験ができ、私の人生において、大きな財産となる思い出になった。今回が初めての海外で、すべてが新鮮で、様々なことに驚き、感動し、自分の視野を広げることができた。英国の景色は、緑の少ない建物ばかりの景色を想像していた。しかし、実際に見ると、私の想像とは異なり、一面が緑の草原で、沢山の羊や牛が放し飼いされていた。自然と街並みが調和していて、とても綺麗だった。自分の目で見ることによって新しい発見が出来た。

私が特に印象に残っていることは、英国は、古いものを大切にするという文化が素晴らしいなと思った。湖水地方では、昔ながらの壮大な景観を守るために、許可がない限り、建物を建て替えてはいけないという規則がある。湖水地方のように、日本にも多様な地域資源があるが、風景が統一化していないというのが地域資源を上手く利用できない課題だと思う。ブライトンでは、元々ある街並みを残したいという地元の人の強い意志で、ブライトンにマクドナルドが出来るのを反対した。英国は、都市は都市らしく、田舎は田舎らしく景観がまとまっている。新しいものだけではなく、古いものにも価値があるということを、日本人はまだ気づいていないのだと思った。

また、英国で、さまざまな訪問先で話を聞き感じたことは、景観・地域を守ることへの市民の意思がとても強いということだ。日本と同じように、英国でも、景観が荒れていた時代があった。しかし、英国では、市民が自ら立ち上がり、グラウンドワークやナショナル・トラストを立ち上げ、地域の問題を解決するために活動している。私たちが訪れたオールストン・ムーアは、まわりに町がなく、人口は2000人弱の小さな町だ。高齢者の割合が高いなどいろいろな問題がある。日本にもオールストン・ムーアに似ている町がたくさんある。しかし、ここからが英国と日本の異なる部分である。英国では、自分たちで何ができるのかと考え、事業を起こしている。常にすぐそばにある問題に目を向け、それを解決しようとする行動力がある。日本は、行政に頼りすぎていて、自ら行動するという事はない。これが当たり前になってしまっているのが問題だと思う。

私は英国スタディ・ツアーを通して、英国も日本と同じような問題を抱えているが、その問題に対する解決方法の違いを学ぶことが出来た。まわりや行政に頼りっぱなしになるのではなく、自ら行動することが地域を良くするために必要なことだと、渡辺先生からも聞いていたが、英国に来てみて、改めて感じた。自分にできることが何か分からないが、小さいことでも行動に移していきたいと思う。また、今までは海外に対して「怖い」と思っていたが、現地に行くことで、私の中の海外へのイメージが変わり、たくさんの国を自分の目で見てみたいと思うようになった。

最後に、今回このツアーを企画してくださった、渡辺先生、石岡さん、丁寧な通訳と説明をしてくださった松田さん、小山さん、ロビンさん、各視察先の団体の皆様に心から感謝している。

都留文科大学 3年 遠藤由唯

今回の英国スタディ・ツアーで、私は初めてイギリスに行ったが、見るものすべてが初めてで、新鮮な気持ちであった。また、イギリスの街並みというのも映像などで見ていて美しいなとは思っていたが、実際に見てみると、町全体が統一されていて、古い建物も新しい建物もあるのに、どちらかが浮くことなく存在しているのを見て、景観づくりがとてもすてきだと感じた。今回のこのツアーに参加したことによって自分が見たことのないものが多くみることができ、ほかの国から日本が学ぶべきことはすごくたくさんあるのだと実感するきっかけにもなった。それによってほかの国について学ぶことの大切さというのを感じることができ、私にとってこのツアーはとても有意義なものになった。

私がツアーに参加してみて一番驚いたことは社会的企業の多さと、その活動の活発さだ。ディグベス地方のように、社会的企業が多く存在する社会的企業タウンなんていうところもあって、日本との違いを大いに感じた。

日本では、企業はお金を儲けることばかりであり、儲けている企業が環境のためにと活動していることはたまにあるが、それはごくまれなものである。また、日本で社会的企業、もしくはNPOに就職という人は本当に少ない。日本の社会的企業やNPOへのイメージというのは、「お給料が少なそう」とか「何をしているのかわからない」といったものなど、良いことをしているのはわかっているけれど、いざ自分が就職するとなると不安といった感じだ。

確かに日本のNPOというのは、なにかほかに仕事をしている人が休日に行ったり、お金が足りずに活動を続けられなかったりというところが多い。しかしながら、イギリスの社会的企業は、イギリスでは現在、そうしたものへの補助金が減らされて行っている中で、ホームページや看板やポスターなど様々な形で自分たちの団体をしっかりアピールしていて、活動を続けていくための努力を行っていた。また、オフィスも私のイメージする狭いオフィスでは全然なく、毎日来るのが楽しくなりそうなくらいとてもきれいで、おしゃれだった。

こうしたことから、日本のNPOに足りないのはアピール力とイメージアップなのではないだろうかと感じた。働く環境を整えなければ人は来ないし、狭く暗い事務所よりも、明るくおしゃれな事務所のほうが働きたいと思えるだろうし、そうした働きたいと思える環境を整えるためにはお金が必要だ。お金を集めていくためには自分たちがどんな活動を行っているのか、また、その実績はどのようなものであるのかということアピールしていかなければならない。そう考えると、NPOなどの団体というのは企業よりも多くのことを求められる仕事であると感じた。

このツアーを通し、日本は「社会の役に立つ」であったり、「自分のまちをよりよくしていく」といったりという心がたりないと感じた。イギリスの方たちは自分のまちを愛していて、そのまちをよくしていくために全力を尽くしていた。私がイギリスのどのまちに行っても「すてきな」と思ったのは、そういったまちの人の気持ちが表れていたからではないかと思う。まちは、住んでいる人たちに愛されるほどそれにこたえるようにすてきになっていくのだと思った。

最後に、今回のツアーでこんなにすてきな体験ができ、たくさんのことを学ぶことができたのも、企画してくださったグラウンドワークの皆様や、引率してくださった渡辺先生、石岡さん、松下先生、通訳の松田さん、小山さん、阿部さん、湖水地方を案内してくださったロビンさん、

快く受け入れてくださった訪問先の方々、共にまわった研修生の方々に心から感謝したい。ありがとうございました。

Ⅲ. 全体ふりかえり・講評

1. 立教セカンドステージ大学 参加者

1-1 8期生 青木 美恵

私が今回このツアーに都留文科大学の学生のみなさんと一緒に参加することになったのは、ゼミを担当されている渡辺豊博先生の授業を受けたことがきっかけだった。

私は2015年4月から立教セカンドステージ大学（以下RSSC）に通い始めたが、その年の後期にどんな授業を取ろうかと悩んでいたところ、知人から「渡辺先生の『セカンドステージと市民生活』は面白いよ」と強く勧められた。実際授業に参加してみると、先生の話術に引き込まれるようになり、今まで自分とは無縁であった地域コミュニティのことにしても興味を持つようになった。「グラウンドワーク三島」の作業にも参加させていただき、「右手にスコップ左手に缶ビール」を実践することとなった。その時まさに、先生の講義を受けただけではわからない、「現場の力」を知ることとなったのである。人間は、50歳を過ぎても「開眼」することができるのだ！是非とも英国の「現場の力」を知りたい！と思ったことが、私が英国スタディ・ツアーに参加したい！と強く願う原動力となったのである。

3年越しの夢(?)をかなえての旅は、私の想像を遥かに超えていた。

私のイメージしていた英国は、女王陛下の国であり、80年代に心ときめかせて聞いていた音楽の国でもあった。近年テロが多い国というイメージもあったが、その裏にある情勢について、恥ずかしながら深く考えることはなかった。

ところが、私が降り立った英国には、偏見を恐れずに言えば、見た目は英国人ではない人たちが数多く生活していた。この人種のるつぼと化した英国で、文化や宗教、歴史観を統一することが、容易ではないことくらいさすがの私でも想像できた。そういえば、70年代後半、パンクロックが流行った時代の背景には、失業問題など「若者の怒り」が根底にあると言われていたな。なるほどこの国には個人や政治の力だけでは解決できない問題があるのだと、改めて気付かされた。それが市民活動の原動力のひとつなのだろうと。

その上で、今回英国で様々なお話を聞かせていただいたことで、強く感じたことがある。最初は行政の力を借りての、市民ひとり・ひとりを救う小さな行動だったかもしれない。それがやがてコミュニティの仕組みをつくり、NPOに力を、社会的企業に意義を与え、政治にも影響を与える。これが市民の「社会貢献」に対する意識の高さ、英国の「底力」なのかと。

個人的な話で恐縮だが、私は渡辺先生の影響を受けて、今年の3月からNPOの活動を始めたのだが、私を昔から知る人たちからは、驚きをもって迎えられた。今までの私らしくないからであろう、それに対しては自覚があるのではないか。それと同時に「すごいよねえ～（意識高いよねえ～）、でも私には無理だよ」と否定的な意見も多くもらった。日本においては「社会貢献」＝「意識高い系」という図式があると思う。ところが「意識が高い」と持ち上げつつ、実は否定的。「意識高い系だね」と言われたらディスられて（否定されて）いるのは間違いない。もっと日本で「社会貢献」が身近になれば、こんな風にディスられなくても済むのになと思うことがある。

話を元に戻そう。人のために人ができることって何だろう。

持続可能な世界を生きるために必要なことって何だろう。英国には様々なヒントがあった。やっぱり「現場」に出向くってすごく大事なことだよ！と強く感じることもあった。実際にその場の空気感に触れることで、感性が刺激されて、脳が活性化されたような気持ちになった。（自己満足？）改めて今回の旅をコーディネートして下さったみなさま方には、感謝申し上げます。

最後に、私も右ひざや腰の痛みをこらえて、もう少しがんばってみるつもりだけど、私たちシニアにはもう、「劇的」に世の中を変える力は残っていないかもしれない。無責任かもしれないけど、今回一緒に旅をした学生のみなさん、あなたたちの生きる時代に何が必要で、何をすべきか考えてみて欲しい。あなたたちにとっても、今回の旅にたくさんのヒントがあったと思う。これからのあなたたちの活躍に期待しています！

1-2 10期生 岡庭 正行

今回の英国グラウンドワーク・スタディ・ツアーは本当に楽しく、知的好奇心を満たしてくれた旅でした。この企画を準備・実施をしてくださった渡辺先生、松下先生、松田さん、石岡さん並びに現地に対応頂いた方々に感謝致します。特に、松田さんと石岡さんには、現地での想定外のトラブルにもうまく対応して頂き、お陰様で非常に思い出深い旅となりました。

現地では小山さんと留学中の安倍さんにフォロー頂き、また湖水地方のフットパス散策では、ロビン・ヘンショウさんと奥さんにガイド役を務めて頂き、随所で貴重なお話を伺うことができました。お陰様で、ナショナルトラスト活動で美しい自然が残されている湖水地方の散策を堪能することができました。また、今回のツアーでは、以下のことが特に印象に残りました。

英国人のボランティア意識の高さ

今回訪問したところは、どこも政府からの援助が大幅に減額されたり、無くなったために活動資金を集めるのに苦労していた。しかし、どこも宝くじや寄付金で活動を継続していた。特に、グラウンドワーク UK では、5年前までは、2,000万~3,000万ポンドあった補助金がゼロとなった。現在も活動資金を自ら調達し、人員も半分に減らし、活動を継続していた。

これらの資金源となっているのは、宝くじや企業からの寄付の他に個人からの寄付も大きいとのことである。英国では、地域の問題をグラウンドワークの仕組みなどを活用して自分達で解決していこうとしている。このような事例が、日本でもグラウンドワーク三島のような例はあるが、非常に少ない。地域の問題は行政に任せて、問題があれば行政のせいにするだけである。

英国人が持っているこのボランティア意識の高さを、我々日本人はもっと学ぶ必要があるのではないかと感じた。それが、長い目で見た時に地域を住みやすくし、日本の民主主義を健全なものにしていくのではないかと思う。

豊かな自然

今回のツアーでは、国内移動は基本的にバスでしたが、車窓から見える自然や手入れの行き届いた牧草地、畑などがとても美しかったことが印象的でした。美しい自然はナショナルトラストで保存し、牧草地や畑は農民が手入れをする。耕作放棄地が毎年増加し、美しい田園風景が失われていく日本の農村と何が違うのか考えさせられた。

訪問先のアットホームな対応

いずれの訪問先でも担当の方が丁寧に対応してくださり、最後に訪問したザ・ビッグ・レモンでは担当の方の息子さんたちも一緒にセブン・シスターズを観光し、とてもなごやかな雰囲気の中で、楽しい交流ができました。

積極的な学生たち

今回一緒にツアーに参加した学生たちはみんなとても明るく、好奇心が旺盛で積極的だったので楽しい交流ができました。今回のツアーで現場を知る重要性を理解したと思いますので、この経験を忘れないで欲しいと思います。社会に出ても、現場を知らずに決して良い仕事はできないからです。

1-3 8期生 木下 将詞

今年3月立教セカンドステージ大学卒業以来、キャンパスに通っていたことが夢であったかの様に肅々と仕事生活に戻っていた。そんな中、渡辺豊博先生からお声をかけていただき、英国スタディ・ツアーに参加させていただいた。恥ずかしながら飛行機移動が苦手な私は長距離移動が伴う欧州には生涯行くことがないであろうと決めてかかっていた。

しかし思い切ってツアーに参加し、渡辺先生の講義で学んだ英国のNPO法人の先進性や社会的企業の実態を学び、訪問地のパブでその地域の人々の雰囲気と歴史を肌で感じる事が出来た。そして都留文科大学の現役の学生達と語り合いながら英国の国土の約半分を巡るツアーはかけがえの無い経験となった。夢には続きがあったのだ。

英国スタディ・ツアーに参加して印象に残ったことはイギリスの社会、自然、街並み、市民生活、建物群が歴史に彩られ風格を備えていることである。多くの社会的企業の存在やNPO法人の先進性、自然や景観を大切にし、これらを持続可能にする仕組み作りは長い歴史が育んだ賜物で、一朝一夕に作られたものではないと強く感じた。

特に仕事で専門とする建築において、英国の建物は築100年以上が当たり前の様に威厳を放っていた。日本で最古のRCアパート世界遺産の軍艦島に存在する30号棟が築100年で廃墟化し朽ちていく様を目の当たりした経験から、この違いを探求することがツアーの楽しみにもなった。

英国はアルカリ風土によりコンクリート造と鉄製の建具が適しているのは見当がつくが、何よりも維持管理が隅々まで行き届いているのが驚きである。鉄製の建具はどこを見ても錆ひとつ無く建物と見事に調和していた。古きものを大切にする。むしろ古きものに価値を求め維持管理を徹底する。そして次世代に大切に引き継ぐ英国流スタイルは何て素晴らしいのだろう。スクラップ&ビルドと消費は美德という風潮が未だに蔓延する日本社会にこの価値観を植え付けるにはどれ位の歳月を要し、どのような方策があるのだろうか。

立教セカンドステージ大学で渡辺先生の講義を受講した中で源兵衛川の再生を皮切りに三島が活性化した現状を三島研修のフィールドワークに参加し目の当たりにした。そしてその体験を経てNPO先進国のイギリスで多くのことを学んだのはとても有意義であった。

この貴重な学びと体験を今後のビジネスの社会貢献活動へのステップアップと近い将来のセカンドステージに生かしていきたい。

今回のツアー催行にあたり渡辺先生を筆頭に、序盤のアクシデント（アトラクション？）をさりげなくいなして英国事情の入り口をご教授いただいた松下先生、バーミンガム最古のバーに登場し、ツアーを華やかに盛り上げ、さりげない気配りが行き届いた通訳と英国事情を生活者の目線で語ってくれた安倍さん、グラウンドワークUKでわかり易い解説とバーで現役学生達に心に響くエールを送ってくれた英国紳士顔負けの小山さん、皆がうらやむ理想の夫婦像を手本に湖水地方の未体験ゾーンに誘ってくれたロビン夫妻、現役学生とセカンドステージ学生の架け橋となり皆を牽引し、後半はコーディネーター役も見事にこなした石岡さん、素晴らしい通訳とユーモアと度胸！で数々のアクシデントから私たちを救ってくれた松田さん、本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。



源兵衛川
2015, 12, 12 撮影



ボートンオンザウォーター
2017, 8, 27 撮影

2. 先行きが見通せない中での平静さ（通訳：松田 徳子）

今年の英国研修は、メイ英首相が来日し、今後の日英 FTA 交渉に弾みをつけようというタイミングでの開催となった。研修の目的は、NPO・社会的企業の先進地である英国の取り組みに学ぶことであり、多くの実践地を訪ね、設立者などからお話を伺うことができた。現場で見たこと、聞いたことは重要な情報だ。しかしそれは英国社会の氷山の一角であることも忘れてはならないと思う。本報告文においては、研修中に印象に残ったことを手掛かりに、水面下にある大きな動きについても概観したい。

1. はじめに

英国での 9 日間の研修は、盛りだくさんで、とても充実した内容だった。異国ならではのハプニングにも多々見舞われたが、無事にプログラムを満了し、笑顔で帰国の途につくことができたことを嬉しく思っている。今回、私は通訳として同行させていただいた。できるだけ分かりやすく、かみ砕いてお伝えするよう心掛けた。皆さまの学びのお役に立てたとしたら幸甚である。

(1) セカンドステージの皆さま

セカンドステージの皆さまの存在が、毎日のツアーの雰囲気をも明るく底上げしてくださったように思う。社会の第一線で活躍され、現役の時から、そして退職された後も、学び続け、そして大いに人生を楽しむ姿は、若い学生にとって、素敵なお手本モデルだと思う。私も、とても刺激を受けた。どうもありがとうございました。

(2) 都留文科大学・渡辺ゼミ生の皆さま

まめにメモをとり、積極的に質問していることに感心した。振り返りをしたり、夕食に行ったり、気持ちよく交流ができて楽しかった。今回の英国研修は、学生の皆さんにとっては、時間的にも経済的にも大きな投資だったと思う。英国で学んだことを自分なりに掘り下げてほしい。大きなりターンを得るためには、具体的に主体的な行動に落とし込んでいくしかない。

私の職業人生は、海外が長かったという話をした。そしてそのきっかけは、ちょうど皆さんと同じくらいの年の時に、インドを歩いたことだったことを思い出した。その頃の私の英語力も、今の皆さんと同じくらいで、そこからのスタートだった。わくわくするような経験も多くあったが、それと同じくらいたくさん悔しく情けない思いもしてきた。今回、通訳で、そしてトラブルを解決するために使った英語表現のひとつひとつは、これまでの私の学び積み重ねだ。

楽しかったこと、面白かったことはもとより、うまくいかなかったこと、失敗したことも含めて、余すところなくいかして行ってほしい。

(3) 謝辞

現地で、研修に彩りとスパイスを添えてくださったヘンショウご夫妻、小山さん、そして安倍さんに、心からのお礼を申し上げたい。また事務局として奔走してくれた石岡さん、訪問先と調整してくださった松下先生にも感謝の気持ちでいっぱい。そして何より、笑いとおどろきと学びが満載のツアーを企画・統括してくださった渡辺先生に深謝する。

2. 平静を保って普段の生活を続けよう

現地ですぐ印象に残ったことは、「平静を保って普段の生活を続けよう (Keep Calm and Carry On)」という人々の姿だった。この標語は、第二次世界大戦の直前に、開戦した場合のパニックや戦局が悪化した場合の混乱に備えて、英国政府が作成したものであることはよく知られている。今年に入って、マンチェスターやロンドンでのテロが相次いだ。しかし、大都市バーミンガムで、私たちが出くわしたのは、ドレスアップをした若い女性たちでにぎわう週末の夜の光景だった。社交を楽しむ人々で、通りは華やぎ、店内も活気にあふれていた。「普段通りに行動しよう。事件の後で外出を控えることは、テロに屈すること」と人々が話すのも何度か耳にした。さらに、郊外に足を延ばすと、牧草地が青々と広がり、数百年前から続く伝統的な営みが続いていた。日本のニュースでは流れない英国の日常に目を向けることができたのは、今回の研修の醍醐味だった。

3. 先行きの不透明さ

その一方で、人々の間で、先行きの不透明さが共有されていることを随所で感じた。多くの要因が複雑にからみあう情勢について、ここでは英国のEU離脱(ブレグジット)と緊縮財政政策をとりあげたい。

(1) ブレグジット

EUは、ヨーロッパから戦争をなくし、共存共栄をはかろうという壮大な試みである。これまで、ヨーロッパ大陸で国境を接する国々が、絶えず戦争を繰り返してきたという歴史への反省から、EU加盟国では、政治的、法的、経済的、あるいは社会的、文化的な統合を進めることで、ヒト・モノ・カネの自由な移動と通貨統一を通じた経済圏を構築してきた。

しかしこのEUから、英国は離脱することを選択した。背景にある要因として、EU加盟国などからの移民が、毎年20万人規模で英国に流入していることへの不満の高まりがまず指摘される。離脱派は、EUから離脱して、移民の流入を制限すれば、国民の社会保障費の負担が減り、雇用環境も改善すると訴えていた。またEUへの拠出金について、英国は毎週3億5千万ポンド(約530億円)に上る巨額の負担をしていることが広く報じられ、EUから離脱してこれを英国国民のための財源に充てるべきだという声も大きかった。さらに主権の問題では、英国の法律の多くがEUに決められているという現状への反感から、EUから離脱して国の主権を取り戻すべきだという論調も勢いを増していた。

英国は、離脱後も、EUとの間で良好な関係を続けていくことはできるのだろうか。そのためには2019年3月末までに、お金の貸し借りの清算や、それぞれの地域に住んでいる人々の権利をどこまで認めるのかといった「離脱協定」と、新しい貿易や投資のルールを定める「経済協定」を結ぶ必要があるとされる。

ところが、ブレグジットを巡るEUとの交渉は最初から難航している。先日、メイ英首相は「悪い合意を結ぶくらいなら、何の合意もない方がましだ」と語るなど、EUと決別する覚悟もちらつかせる事態となっている。

移民の流入については、今回の研修においても随所で実感することができた。レストランやホテルなどで、従業員と言葉を交わすと、ポーランドなど東欧出身者ということも少なくなかった。さらに特に都市部ではモスクが増え、アラビア文字の看板を掲げる店が立ち並び、ヒジャブをま

とった女性たちが行き交う光景も多く見られた。

ブレグジットがもたらす影響が、政治・経済の分野にとどまらないことは言うまでもない。BBC は今年1月、「ブレグジットによって、最も大きな影響を受ける産業は農業だ」とする記事を掲載した。英国の農家・畜産家の収入のうち、平均で60%はEUからの補助金であり、この補助金がなくなれば、90%の農家・畜産家が壊滅的な経営困難に陥るであろうという予測もある（BBC “After Brexit: What happens next for the UK’s farmers?” 2017.1.5）。

さらにブレグジットが、英国の食料安全保障にも大きな影響を及ぼしそうなことも、押さえておくべきポイントのひとつであろう。その前提として、1990年代に8割近くあった食料自給率が、現在は6割程度まで下がっているという状況がある。またこのところの数十年ぶりとも言われるポンド安の要因も大きい。以前は安く購入できた輸入食材の価格が高騰しているのだ。他方、これまで大量で安価な労働力として、農作物の収穫や加工食肉や乳製品の製造を支えてきた東欧からの移民たちが、ブレグジットを前に英国に見切りをつけてEU圏内の他国に移る動きも広がっている。農家の間では、必要な労働力を確保できず、せっかく育てて収穫期を迎えた作物を、廃棄処分にせざるを得ない事態も生じている。またそのことが、流通量の減少に拍車をかけ、食料価格の上昇につながっているのである（日本経済新聞「食にEU離脱の影響」2017.8.29）。

EUの前身であるEEC（欧州経済共同体）やEC（欧州共同体）が発足した当初、英国は加盟を見送った。英国が方針を転換して加盟を申請したのは1961年。当時、英国は「英国病」と揶揄されるほど経済が疲弊しており、ヨーロッパとの結びつきを深めることで、経済の回復を図ろうとしたのだった。そして今、再び英国は、欧州と一定の距離をとることを決めた。ただ半世紀前と違うのは、私たちは加速するグローバル化の真ただ中にいるということだ。英国は、特に1980年代以降、米国と共にヒト・モノ・カネ・情報のグローバル化の旗振り役であった。ブレグジットにより、英国はヨーロッパという繁栄の足場を一部失うことになる。英国は今後どのように国の発展と安全保障を確保しようとするのだろうか。引き続き注視したいところである。

(2) 緊縮財政政策

訪問した先々で、補助金や社会保障費が大幅に削減されていることの影響が語られた。環境省によって設立されたグラウンドワークもその例外ではなく、数年かけて国からの補助金がゼロになるという厳しさには少なからず驚かされた。

英国では、リーマンショック後の景気後退への対応として、当時の労働党政権により緊縮財政政策が導入された。2010年に保守党政権が誕生してからは、財政赤字の改善を目指した一層の健全財政化が進められ、主に公費削減と増税により、2015-16年だけでも1,100億ポンド（約15.7兆円）を捻出したとする試算もある。またGDP比の債務残高も、2010年レベルの半分にまで削減したとされる。（Wikipedia “United Kingdom government austerity programme”）。

さらに保守党政権は、高福祉からの転換を前面に掲げ、法人税引き下げや富裕層の所得税減税など、いわば富裕層優遇策を進めている。英国のEU離脱の是非を問うた昨年の国民投票では、生活が苦しいと感じる層の多くは離脱票を投じたと言われる。貧困層においては、EUからの離脱により、国による救済策が強化されることへの期待が大きかったのだ。しかし、現政権の政策の中にその傾向を見出すことは難しい。

これは逆に言うと、社会のセイフティネットとして市民社会セクターの拡大への期待とニーズ

が高まっているということかもしれない。今回の研修においても、少なくとも中流以上の英国人にとって、募金や寄付が生活の中に根付いていることを見聞きする機会も多々あった。今後、具体的な事例の収集を増やすことで、理解を深めていきたい。

4. まとめ

英国で先進的な取り組みを行っている NPO や社会的企業を回り、ミッションの達成に向けて、マネジメントと現場がタグを組み、さまざまな工夫を重ねている姿に触れることができた。

国や行政からの補助金が削減され、経営的に自立していくことが求められている背景には、売上が国家歳入を上回り、国よりも大きな力を持つ超巨大なグローバル企業の台頭があるようにも思う。今年1月の世界経済フォーラムに先立ち、英国の国際 NGO であるオックスファムは、「世界で最も豊かな8人が、世界で最も貧しい半分の36億人に匹敵する資産を所有している」とするレポートを発表した。

英国では、このような地球規模の潮流が既に顕在化していることを強く感じた。例えば、民泊予約サイト Airbnb や配車サービス Uber などのシェアリングエコノミーが既に一定の市民権を得ていた。ブライトンでは、従来のホテル8,000室に対して、Airbnbが3,000室を提供するまでに拡大していたことは特筆するに値する。

英国も日本も、世界の繁栄と平和を願う民主国家である。しかし、その政策の選択には、対照的な点も多く見出すことができる。痛みを伴う緊縮財政を続ける英国に対して、国と地方の過去の借金が1000兆円を超え、先進国で最悪の財政に歯止めがかからない中で、過去最大規模の予算を決める日本。そして英国が EU からの離脱を決めたのと時を同じくして、日本は米国抜きでも TPP（環太平洋パートナーシップ協定）を発効させて、国境を越えたヒト・モノ・カネ・情報の移動を加速させようとしている。

もちろん両国の間には、文化的にも歴史的にも大きな違いがあり、一概にその是非を論じることはできない。しかし、日本に暮らす私たちも、グローバル時代を先乗りしている英国の経験から学ぶことは多くあると改めて感じている。

3. 講評・感想（松下 重雄）

昨年度に引き続き英国スタディ・ツアーに参加させていただきましたが、今年度は視察先選びと調整に深く関わらせていただき、そのこと自体がたいへん有意義な経験となりました。そのため、今回のツアーのふりかえりとして、どのような過程で視察先を選定したかを、感想とともに紹介させていただきます。

今年は、ロンドンやマンチェスターなどの大都市でテロ事件が続いたこともあり、渡辺さんからは、まず安全面に配慮して、ロンドンを中心に組み立てることは避けようとの意見をいただきました。そうしたことから選出された地域が、グラウンドワークの本部があるバーミンガムの社会的企業地区のディグベス、イングランド北部の社会的企業タウンのオールストン・ムーアおよびロンドン近郊の観光都市ブライトンです。視察先の選定にはウェブサイトの情報に主に頼っていますが、グラウンドワーク UK をはじめ、いわゆる NPO や社会的企業の間支援組織のサイトからの情報が中心です。英国には全国レベルや地方レベルの間支援組織が数多くあるので、そうした団体のサイトから視察候補先の豊富な情報にたどり着くことができます。

グラウンドワーク関係の視察は、本部のグラウンドワーク UK のウェブサイトに各地で活動するグラウンドワーク・トラストの詳細な情報が掲載されているため、どこか一つのトラストを訪問したかったのですが、スケジュールの関係で実現できませんでした。しかしながら、グラウンドワーク UK 本部の訪問から今回のツアーを始められたことは、ツアー全体の基調を形づくることのできたのではないかと思います。政府からの補助金がカットされながらも、英国最大規模のまちづくり NPO として活動を展開するグラウンドワーク UK の戦略やビジネス・モデルには、多くの示唆を得ることができました。

ディグベスとオールストン・ムーアは、いずれも社会的企業の全国的な中間支援組織であるソーシャル・エンタープライズ UK (SEUK) のサイトで紹介されています。SEUK では、社会的企業が集積する地区を社会的企業地区という概念で整理し、英国全土で 17 地区が選定されています。ディグベスとオールストン・ムーアは、その社会的企業地区の一つで、前者は最も都市的で最も集積度の高い地区、後者は最も田舎にあり英国初の社会的企業タウンという称号が与えられています。したがって、もっとも対照的な社会的企業地区を、今回視察したことになります。

ディグベス地区は、かつての都市衰退の象徴であったバーミンガム都心部に位置する地区ですが、半径 2 マイルの中に約 70 の社会的企業が集積する様子には、たいへん驚かされました。その牽引役を担っているのが、今回訪問した iSE という社会的企業の間支援組織です。印象的なことは、女性がリーダーであることです。他の組織でもそうでしたが、英国の NPO や社会的企業は女性が活躍する場面を多く見かけます。また、iSE が中心になって、地域の小規模な社会的企業のコンソーシアムを形成しながら、事業を組み立てていく方式もたいへん興味深いものでした。iSE スタッフについて歩きながらディグベス地区の複数の社会的企業を訪問しましたが、それぞれの組織がもつ社会に対する意識や地区全体が醸し出す市民エネルギーのようなものは、英国スタディ・ツアーでいつも感じる特有の感覚です。

オールストン・ムーア地区は人口 2,000 人程度の小さな農村集落ですが、26 もの社会的企業が活動しています。コミュニティ・ショップをはじめ生活サービスに関する組織を基本にしながらも、中には英国ならではの保全鉄道の団体などもあり、地域住民による地域マネジメントが実現されています。これまで廃業した組織がないというのも驚きで、もう少しその実態について詳細

に調べてみる必要があります。日本でも地域運営組織のあり方が検討されており、オールストーン・ムーアの取り組みは、大いに参考になると思われます。いずれにしろ、オールストーン・ムーアの方々がいきいきとたくましく生活されている様子が印象的でした。

スタディ・ツアーの最終日に設定した都市が、ブライトンです。昨年の英国スタディ・ツアーの自由行動日に、渡辺さんとともに都留文科大の学生が訪れ、その海岸景観がたいへん好評だったことから、今回の訪問先として設定しました。訪問先はブライトン観光局とビッグ・レモンという社会的企業です。残念ながら、私は仕事の都合でブライトン訪問はできませんでしたが、それぞれの選定意図は次のとおりです。

ブライトンは、英国有数の海浜リゾート都市であるとともに、毎年大規模なゲイ・フェスティバルが開催され、LGBT コミュニティが形成されるなど、文化的にも非常にユニークな都市として位置づけられています。そうした地域の観光マネジメントを担う組織がブライトン観光局です。現在日本では地域の観光マネジメントを担う組織としてDMOの導入が検討されていますが、その参考事例になるのではないかと思います。また、ビッグ・レモンは、環境に配慮したコミュニティ・バスの運営組織です。こちらもSEUKのウェブサイト経由でたどり着きました。SEUKでは社会企業大賞を毎年選出していますが、ビッグ・レモンは、2016年の環境部門で受賞しています。環境配慮型の公共交通のあり方の参考事例としてだけでなく、地域の大学と連携したバスの運行などもおこなっていることから、大学と社会的企業との連携事例としても参考になるのではないかと期待して選定しました。

さいごに、今年度のスタディ・ツアーには、私の所属する長野大学からの学生参加は残念ながらありませんでした。前述のとおり、このスタディ・ツアーに参加すると、成熟した英国市民社会の雰囲気を感じ取ることができます。こうした刺激的な体験を、多くの日本の若者に提供したいと願います。来年は、本学の学生とともに参加できればと思います。

4. 講評・感想（安倍 万莉子）

英国での研修お疲れ様でした。2泊3日と短い期間ではありましたが、今年も充実したプログラムに同行させていただき、とても学ぶことの多い経験になりました。改めてお世話になった皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。今回は Alston Moor と湖水地方の視察に同行し、それぞれ社会的企業タウンと National Trust 保護地区の事例を見ることができました。

イギリスで生活していて強く実感したことのひとつとして“Sustainability”（持続可能性）に対する意識が市民レベルにも広く浸透しているという点があります。今回訪問した社会的企業タウン Alston Moor でも、環境、経済、社会の3つの面で持続可能なコミュニティを作るための努力が見られました。特に“Things don't work unless they are community-driven”とおっしゃっていたのが印象に残っています。政府や自治体からの支援が限られている中で、住民のニーズに応えたサービスをビジネスにすることで、ハンデの多い環境の中でも経済を循環させ、人材育成に取り組んでいました。

近年では Heritage Lottery Fund の助成金を得て Townscape Heritage として建物の外観を改善するなど、町としての魅力や付加価値を向上させる取り組みも印象的でした。これにあたって資金面での補助を受けるだけでなく、保全に必要なスキルを外部のプロフェッショナルから地域の建築関係者に教授することもプロジェクトの一部として組み込んでいたそうです。このような面からも、自助の精神（Self-help）と持続可能性（Sustainability）の意識が根付いていると感じました。高齢化への対策、移住者や旅行者に対する町の情報発信、インターネットの活用など、まだ検討・改善すべき点はあるようでしたが、地域政策の理想的なモデルを見ることができたように感じます。

観光学を専攻していた身としては、Alston Moor が今後どのように観光を産業のひとつにしていくかという点も興味深く感じました。上記の Townscape Heritage プロジェクトに加え Heritage Railway の駅を復活させるための整備も住民が中心となって行い、現在これは重要な観光資源であるとともに Alston を他地域とつなぐ役割を担っています。

日本でも地域再生の財源として観光開発が各地で行われていますが、やはり行政の意向と市民の気持ちが乖離している事例が多いようです。Alston Moor のように市民ベースで町の資源を磨いていく取り組みはイギリスでも貴重だと思います。コミュニティが比較的小さく、すでに意思決定の基盤ができていたから実現できたのだと思いますが、見習いたい部分の多いケースだと感じました。

さて、皆さんのレポートを読んで、それぞれの着眼点から日本の改善点と照らし合わせていらっしゃるのがよくわかりました。昨年度参加した際も思ったことですが、スタディ・ツアーに参加される学生の皆さんを見てみると、積極的に行動する土壌がしっかりと出来ているなと感じます。普段のゼミでの実践的な内容が活きているのでしょうか。新しい行動を取ることにに対する倦怠感のようなものが世代を問わず今の日本に取り巻いている中、これはとても貴重なことだと思います。今回のツアー参加を通して得られた見識と自信を糧に、今後も益々活躍されることを期待しています。

5. 講評（渡辺 豊博 都留文科大学特任教授）

今回の英国スタディ・ツアー参加者の皆さんは、研修が終わり、安全に帰国できて、ホットした心境だと思います。遠い異国の地に、僅かながらの不安と、多いなる期待を抱いて、勇気を持って旅立ち、研修旅行を通して多種多様な刺激を受け、やや消化不良の状態だと思います。

毎日の大学生活、日常生活の中では、なかなか感じる事ができない、今まで過ごしてきた人生の中で初めての体験・学びばかりが、まるで、ドラマのように毎日連続的に現れ、その度、その事象に驚き、感動し、刺激を受け、新たな問題意識が、醸成・育成されていったことだと思います。

各人、資金的・経済的な課題を抱えた中で、アルバイトに以前から懸命に取り組み、英国研修への参加を励みに楽しみとして、節約や貯金、両親の同意に取り組み、結果的に今回の研修に参加できたのではと思います。時々こんな辛いことは止めて、国内旅行で充分ではないかと迷った時期もあったことでしょう。

しかし、迷いを抱えながら、地道な努力と決意を持続したことにより、今回の研修に参加した皆さんには、所定の研修を的確に終了し、報告書をまとめた今、潜在意識の中に、英国の先進的な国づくりの知識やまちづくりの創造的なノウハウ・仕組みなどの情報が、他の人には認識できない「知見」として蓄積されています。今回の研修を通して、皆さんの心の中に無意識の自信と強さが備わり、これらの経験知や体験知が必ずや「言葉の力強さ・説得力」に成長していきます。

同時に、英国各地の現地に出向き、現場を見て歩き、実際の空気感を実感するとともに、英国の現実や若者たちの様子、テロやオリンピック後の街の雰囲気、食文化の実情、英国各地の街の特徴や違い、文化的・歴史的な背景、豊かな田園風景、英国人の気質と人情、自然環境や景観を大切にする気質と強い意思などを自分の目と感性を通して学習できたと思います。

これはやはり、資金的な困難や不安を払拭し、勇気を持って参加の決断をした、皆さんに特化した成果・経験だと思います。今後の就職活動における面接時での発言や考え方の説明、就職後の仕事上での営業活動などで、皆さんでしか、話せない優位性のある興味を引く「言葉の力」として、英国研修の効果を徐々に発揮してくるものと確信しています。

今後は、この刺激と知識を劣化させず、持続させ、自分としての潜在的な優位性・特徴ある知識として、実社会の中で活用・発展させていけるのが、皆さんの課題・宿題だといえます。今後の皆さんの活躍と成長を期待しています。本当にご苦労様でした。

足の痛みで十分に歩けず迷惑をかけてビールを飲み過ぎた渡辺ジャンボより